むさし

廿二

22

△玉鬘十七 廿二、以歌爲巻名 源氏卅五ノ三月ヨリ十二月迄ノ事此巻ニ見タリ

花云此巻ハ乙女ノ巻ニ次第シタレバ六条院卅五ノ三月ヨリ十二月迄ノ事ヲ云ルナリシホヨソ夕顔ノ上ハ
五条ワタリニテ源氏ニアヒソメテ何カシノ院ニテ物ニケトラレテムナシク成侍リシ其時ハ夕顔ノ上十八ノ源氏十七ノトキノ事ニヤ
ソレヨリ先ニ致仕大臣ノ頭中将トユシ才ニアヒタニヒテ玉カツラノ君ヲハ儲侍リシ此娘四ノ年西ノ京ニヤドリ侍リシガ乳母ノ
男太宰少弐ニ成テ下リシニ具セラレテ肥前國ニシテ廿年計過シ侍リシガ肥後國ニ太夫ノ監ト云シハ物アリシガ此娘ヲ思ヒ
カケテ可遁レナカリシカバ俄ニ乳母子ナドシカタラヒテ京ヘニゲ上リシ時初瀬ニテ右近ノ君ニ行アヒテ夫ヨリシテ六条院ヘハ迎ラ
レタマヒシ今年玉鬘ノ君廿二ニアタルベシ夕顔ノ上ニゾ世ニ侍ラバ卅七ニヤ成給ベキ紫ノ上ハ廿七ハト此巻ニ見タレ氏識ハ廿八成ヘシ
玉カツラハ哥ノ詞ヲ取テ巻ノ名トシ侍リト云、 太宰ノ少弐ガ妻ト成タルハ夕顔ノ乳母也夕顔ニ付テ六条院ニイタル右近ハ
乳母子也 今此巻ハ玉カヅラ一身ノ事ヲ書タルト可心得也然ハ夕顔ノ事ヲ云出シタルモノ也末摘ノ巻ニ思ヘルト書出シタル
詞ニ似タリ但心ハ相違セルニヤ 末ムノ巻ノ心夕顔ノ仕ル人モヤト尋給ふ也此巻ノ心ハ六条院ヘ皆くウツシ給ハ夕顔モ
存生ナラバト思アロ出スル也面白キ手段也 玉カツラノ君ハ三ツノ時父中将ニカクレテ五条ノ夕顔ノ宿ニ有時ニ夕顔ノ
乳母ニ預ケテ西ノ京ニヤドシ給ヘル乳母ノ男太宰ノ少弐ニ成テ下リシトキハ此君四ツ也

河海云露ワスレズトハ夕顔ノ巻ニ夕露ニヒモトクハ花ト云見シ夕顔ノウハ露トアル所ノ心ト云〻
ワカレ給ヒテ廿ケ年過タル也

アラマシカバ 夕顔ノ存生ナラバト云也
河ニ 在中ニアラニシカバト思人ノナキカ多クモ成ニケル哉 為相

須广ヘ下リ給フ時紫ノ上ヘ人々ニそ付タル也 右近モ前ニ見タリ此時紫ヘ付ラレタル也

瀬習 シワカ哉也 右近ノテイラ紫ノ所ニ覚スル也

△年月へだゝれど、あかざりし夕顔を露
わすれ給はず、心々なる人の有様どもを見給ひ
かさぬるにつけても、あらましかばとあはれにくち
をしくのみおぼし出。右近はなにの人数ならね
ど、猶そのかたみと見給ひて、らうたきものにおぼして
ふる人のかずにつかうまつりなれたり。須磨
の御うつろひの程に、対の上の御方にみな人
々きこえわたし給ひし程より、そなたにさぶらふ
心よくかいひそめたるものに女君もおぼした
れど、心のうちには、故君(夕顔)ものし給はましかば
あかしの御方ばかりのおぼえにはおとり給は

アフサズ 不逢ノムニ

さうまうしもふゆのきはんなかしふうわりりるをぶるま
おとしあふはなとわきたくめ給はんなのさなわ
それはおひて庭んことなきはへしうよしあるはへめ
この涼しのうはさのうつ乃まらにはまとらひ給な
ましと思ふよあうはるしくなん思ひ老ほのみ
西乃京にとまりしわか君ずゆくゆく所もしらぬ
ひと庭の物を思ひはくみ文よりひなくしくふ
まわてまかなりすなどくちうるてめ給し我まて

源氏我名モラスナト右近ヲロカメ孫丁前ノ巻ニ見タリ 古今ア イヌカミノトコノ山ナルイサヤ川イサトコタヘテ我名モラスナ

うわきこえてさば給ても君ばまゆえさわし猫よ
我の涼めれかうのおとこか前り成ていきけまば

玄ノ脱ニダ京ニテノ一ツ寸

くずわよ名わりれわか君のよはりなるとしず

ぼくしへはい義を給母君の涼ゆく所を志てむかう
よ後川乃棟備よゆてよはひらなを急てよはべき
所し我よ借はきこえけまどう弁りえきていそぎ
さるばいうくいきん言の君をたなるいはうさみ
りの御なめあやしよは叶ちふさん東わてはるり
ふるおとりおはきんことのなしききとなとを
ちて君りおのめかさんとおりひけまどさ給べ事
ぬまうわもおき我うちりりそて君のおりりんうちも
主うけにかうことひ給かずいまうく義こえん又よくも
只に我れ給ひぬよおさな義人我かどめたへまは涼を給
りんもうし後めうは庭しきわなみうつりるめて

姉ヲル許妹ヲ兵ア君ヲサナヘシアテキ

くだり給ふとゆるし給ふへきにもあらじなどおのが
しゝかたらひあはせていとうつくしうたゞいまから
けだかうきよらなる御さまをことなるしつらひ
なき舟にのせて漕出るほどはいとあはれになんおぼえ
けるをさなき心ちに母君をわすれずをりをりに
母の御もとへいくかとゝひ給ふにつけて涙
たゆる時なくむすめどもも思ひこがるゝを舟みち
ゆゝしとかつはいさめけりおもしろき所々を
見つゝ心わかうおはせし物をかゝるみちをも
見せたてまつる物にもがなおはせましかば我らはくだら
ざらましと京のかたを思ひやらるゝにかへる波も

（傍注）小ニノ　娘二人ノ乳母ノ　夕良　二人ノ娘ノ乳ノ師　巴花乳ノ

イトゞシク過行方ノコヒシキニウラ山シクモカヘル浪哉
毛詩 舟子 注 舟人也
花云 夜ニ叶ヲ未見 生シテ不侍 後拾遺 アサヂ原玉マクズハノウラ風ノウラカナシカル秋ハ来ニケリ シバラクハ云ヲシテノコシ侍ルト云
花鳥云 少弐夫婦二人サシムカヒテナクト云ハ 何ニ二人ノ娘ト乳母ト侍ルトイカヽト見侍ルト云 兵アノ君ハアテキト云テイニシヘヲサナキトキノ侍ルナドヨミシ 花云 娘兄オノ二乳母侍ル 後撰ノ説ニ 巴云 同ハ 君ニラホトニナガシトソ思フ 八歳ノ人ノヨメリ昔ハヲサナクシテ 兄オ十二計二成ナバ ウタヨミシ モヒトモ云ヘ此義ニテ何ノ説ヲモ ミロキナリト云 二人ニ

うらやましく心ぼそきに舟子どものあらあらしき
声にてうらがなしくもとをくきにけるかなとうた
ふをきくまゝにふたりさしむかひてなきけり
舟人もたれをこふとか大嶋のうらがなしげに
声のきこゆる

古今 思ヒキヤヒナノワカレニヲトロヘテアマノナハタキイサリセントハ
カネノミサキ 筑前ノ名所也 チハヤフルカネノミサキハ過ヌレド我ハワスレズシカノスベガミ スベガミハ鹿島神也 カネノミサキハ過レドモワスレザルトシ

来しかたもゆくゑもしらぬおきにいでて
あはれいづくに君をこふらんひなの別におのがじし
心をやりていひける乳母円かねのみさきすぎてわれは
わすれずなど世とゝものことぐさになりて
かしこにいたりつきてはまいてはるかなるほどをおもひ
やりてこひなきてこの君をかしづき物にてあかし

夕白ノ乳母カ夢ニ見ル様アリ同シ様ノ女ハ六条院ニテノ見之

仁明天皇承和元年七月ニ勅ノ諸國ノ守以ハ以四年可為限但陸奥出羽太宰府是ハ弘官國始筑前ホ遐邇有千里以五ケ年可為任限云々
已云玉カツラノ年ハ未ゝ相遠アリ源氏ノ年ヲ治定ニス…年ヲワカツ是カ説ノ…カト云ヽ

くらす夢などにたまさかにみえ給ふ時などもあり
おなじさまなる女などうちそふてみえ給へば名残
心ちあしくなやみなどしければ猶よになく成給ひ
にけるなめりとおもひなるもいみじくのみなん少弐
任はてゝのぼりなんとするにはるけき程にこと
なるいきほひなき人はたゆたひつゝすがすがしく
もいでたゝぬ程におもきやまひして死なんとする
心ちにも此君の十ばかりになり給へるさまの
ゆゝしきまでをかしげなるをみ奉りて我さへうち
捨奉りていかなるさまにはふれ給はんとすらん
あやしき所にをひ出給ふもかたじけなくおもひ

左京亮ヲ十キ人之

大宰府

幾ゝのまどいつしかも京にゐてまいりてちゝへ参
人にもしらせ奉りて御すくせにまかせて見奉らん
にも都はひろき所なればいと心やすかるべしと
おもひいそぎつるをこゝながら命たへずなりぬる
事とうしろめたがる男の子三人あるにたゞ此
ひめ君京にゐて奉るべき事を思へ我身のけうをば
なおもひそとなんいひ置けるひとの御子とは
たちの人にもしらせでむまごにしてかしづくべき
ゆへあるとのみいひなしければ人にもみせずかぎりなく
かしづききこゆる程に少弐うせぬればあはれに
心ぼそくてたゞ京へいで立をすれどかの少弐中

あしかりける国の人おほくなどしてとさまかう
さまにおぢはゞかりて我にもあらで年比すぐ
すに此君ねびとゝのひ給ふまゝに母君よりもまさ
りてきよらに父おとゞのすぢさへくはゝれば
にや品たかくうつくしげなり心ばせおほどかにあ
らまほしうものし給ふきゝつゝすいたるゐ
なかの人ども心かけせうそこがるいとおほかり
ゆゝしくめざましくおぼゆれば誰もきゝいれず
かたちなどはさても有ぬべけれどいみじき
かたはのあれば人にも見せであまになしてわが
よのかぎりはもたらんといひちらしたれば故少弐の

むまごはかたはなんあんなるあたらものをなどいふ
なるもゆゝしくいかさまにして都にゐてまかでて父
おとゞにしらせたてまつらんいときなきほどをいとらう
たしと思ひきこえ給へりしかばさりともおろかに
は思ひ捨きこえ給はじなどいひなげくほど仏
神に願をたててなんねんじけるむすめどもをのこ
どもも所につけたるよすがどもいできてすみつきに
たり心のうちにこそいそぎおもへど京のことは
いやとをざかるやうにへだたりゆくもの思し
しるまゝに世をいとうきものにおぼして年三
などしおこなひし給はたちばかりになり給まゝに

乳母ノ子モ宰府ニテ妻ヲ儲シテ十ハキタメルト也

子サウトキテモ子ニシサウトヨム　年三ト年ノ正五九月皆ノ十一日ヨリ三十日ニ云々天帝釈ケ月南州ニ廻リ給ト云々非星年三度者ヲリヲスフトニ云々

筑前ノ任ハテヽ肥前へ行住ぞし

大夫監 一員ハ帥 次大ニ少ニ大監二人小監二人 監ヲ叙爵シテ五位ニ叙シテ大夫ノ監ト云リ 大監ハ正六位下 大夫監ハ従五位下

おとゝのなかにていとあたらしと見あてくちをしかれ
ど世にハ肥前の国ばかりにいひすき物のわかうども
いけるかぎりあるハ人ハまたこのかずのむすめどもに
おもふさま成きてけさうしてわたらふをとぶらふも
いとうるさしうちうしろめたき事までなん大夫乃
かんとてひごの国にやからひろくてかしこにつけ
てハおぼえありいきほひいかめしき兵ありけりのむ
くつけき心のなかにいさゝかすきたる心
まじりてかたちある女をあつめてみんと思ひける
此姫君をきゝつけていみじきかたはありとも我ハ
見かくしてもたらんといとねんごろにいひかゝるを

いともむつかしく思ひていかでかゝる事をきかで
あまになりなんといはせたりければいよいよあやう
がりておしてこの国に越きぬこのをのこどもをよび
とりてかたらふことハ思ふさまになりなばおなじ
心にいきほひをかはすべき事などかたらふに
ふたりハおもむきにけりしばしこそにげなくあはれと
思ひけれおの〳〵我身のよるべとたのまんに
いとたのもしき人なりこれにあしくせられてハ
このちかき世かいにはめぐらひなんやよき人の
御すぢといふともおやにかずまへられず世にしらでは
なにのかひかあらんこの人の

二ケジ・ーイヤトヱナバ
盗カニケジノムニテトゞ

セヌコトモトヱリ者
人モミスホニムセシ
キミガ為セヌワザモ
セミツコヒシキ

かくゐんごろよおりひきゝこえなへるよしいふ御
さいゐんいなまほしうふべきりてあうはかへふせうい
ふもおはしくめすけなくれおとくもなふひのつけき
うよいあうむまくしだましぬふいうわなば
きぬうどもりしでんといひおどさばいとしし
也きさてなりの、これうみなるぶさのすきなん我
いゑあれぐしくあふしきうあわこかえけ
の思ひしこともあわとうくあまへく京かあけなれ
てんといふむあれなき心どひて夜のうひ
なくてさもうへ思てゆくゑ我ぶるきうぬかにわに
人かれくすてみなうむとあう思りさ家もの

ダミメリケル エニリタル
トヱリ八但又コトバノ
エニルトハヱガタカランヤ
志モ至テ逢アシキハ十ニ
リタルモ日前可成ヤ
但イトカゼタルトヱルニ
昔ニイナカ人八又云
キヽニノ、ニガリル
ラスヱシトヱかい
代ゑ アブミニテヤシ
ナハレタル人ノ子ハシタ
ダミテコソモノ注
相見ゑ三し

假想人 假借人
自装人
竹取云 夜ヤスキイモ
ネズヤミノ夜ニモ出テモアナヲクジリカヒヽソシテトヒアヘリ
ヨバヒトハ云リ夜這トモ ケサウ人ナラバ夜ルコソハタダニカヽル寸ヨリ
ハサニカハリタル夜這人トし来ル

なかゝよきことゝのおもはん事と思ひなげく我もさて
我はいと覚えたる義男と思ひて又などいてなきにし
もなどきこえなげなるかたかへてかゝるのこゝちきこしかうし
きゝけりいまきえあげくなりしくうなとわと思ひ
にね云氣づいとたみたわく女などもこの家の
志らうをかくらひとわておつきてきこえわに年三十
もうわあるおのこのなけたゞくめくわとわて
きこえなげまどおりひなしうとましくあこ屋の
なるみるまひなどみるもゆくしくおかゆきあひ
きうちよけりあうかいるうれてさんへけふかぬうち
けさう人は世をかくれたる我あうよひとはいひ

イツトテモ恋シカラズハアラネドモ秋ノユフベハアヤシカリケリ
共ニカヘタル春ノ夕暮ト云ニ付テ秋ナラネドモ夜ハヒトヘニカハリタルト云ヨリ下ヘ付タル詞也
夜ハヒトツニカハリタルト云トキハ上ヘ付タル詞也
リニノ孫ト姫ヲ云シ乃乳母祖母トキ也

けはひさまのいへハかなき春乃夕暮なれ秋なれどもあや
しうわきわくとう遣ちつ給はずしとそなげハ
おとゞりでおはしけるのいとなさけをびきうくしまし
多給し給へしかゞのでありひからひやさむと
おもひたまへしかどもさらに給はずしなもをゝを
きこえず侍し程はいぬかるしくそかく遣給めし哉
すみうれまうりいかうりはうらまうらべくなん
んぶしなきけまして人ふきいとひさかるり
志めそきみうひばきみおりし絶にん女志すぢ
きとようき給はまゐらいとうさしけるしさなは
げ程かやさくのきえと思ひますしていさきます

中人后ノ位ニモシトラス程可然ト云心也
乳母ナル乃母君ニ姫モ何トテ幸トネ不在ハナキラ宿シウワタチキニヤ片揃ル人ニナケキ井給ヲカナシテ苦思ト也
己云付此ワザトコトシシヨムベシヤメテシハナシサニノムアリト

なんちうけ大納言へ義おもぶもまふくふかおかしけ
なほすいようぬ女ふともはまゝおひさわて侍従
きこしゑしうと母なる里さわともすやはかる哉
ひとしかえかハ志侍わたんやまる君なバきは我比
くろぬまれとしまらし物をゆかどいとすけまりひ
はぐくみすいふくの終ふをいふもさいなくいわや
思給ふとすくせつこなき人にやや侍らんおもひそ
まろうり侍まていうそうへ小清らんをうまんと人
さま遣ば給めしよ侍め遣バ心ぐるしうく見給へまゐらひ
ぬふかういふさうふか分わりしそうわれ天下なり
めつふ遣わしおま遣給へまともなふおりいはなう

其日計トハ今日計ト云ニハアラス日取ヲ定ルヿ也

此月ハ三月也三月ヲ祝言ニイムヿ也説ナキトミヽ舎人ト思テ云可成

花云ヒゼン国松浦郡鏡ノ明神ハ太宰ノ少弐藤原広嗣ノ霊ヲ後ニ鏡ニ化又鏡山ハ神功皇后ノ鏡ニ化シテ石ト成ヲ鏡山トハ云リ是ヲモ鏡ノ神ト可云ニヤ下ノ句ニ松浦ハ相崎日社也ト云ルニツキテ石清水八幡トヲタイノ由聞ヘ仍シカラバ鏡ノ神ニ二ツノ儀ニ云ニヤ只ヤ清テ後ニ心カハルニシト思誓云可成

まはわやめてん国のうちの仏神はおのれになん
なびき給へるなどほこりゐたりその日はいつかと
いふに此月はきのはてなりなどゐなかびたる事を
いひ出づおりていくきはにうたよままほしかりけれ
ばやゝひさしう思ひめぐらして
君にもし心たがはゞ松浦なる鏡の神を
かけてちかはむこの和歌はつかうまつりたり
となん思ひ給ふとうちゑみたるもよづかずうひ〳〵
しやあれにもあらねばかへしすべくもおもはねど
むすめどもによませゝどまろはましてものゝ
おぼえずとてゐたればいとひさしきにおもひ

ニテヤ行トシタルト云ゾト監カソバ来ニ乳ノシビヘテトシ

乳云テノ心トテチカヘテトキキカスルハ今年アリテモ此人ハ行ワノテイシリノ仏ヘタラバ神ウラクモ思ハントヨメルヲ監ヘノ一ツイトフニハアラズトシボケ〳〵シキ人ハシイトタヲ切サリトヨム人モアリ云シ シウサウ〳〵トニ云ん 了定ノ心也 栄花物語ニシイ〳〵サリ〳〵ト云詞アリ

わびてうちおもひけるまゝに
年をへていのる心のたがひなば鏡の神を
つらしとやみむとわなゝかし出たるをまてや
こはいかにおほせらるゝとゆくりかによりきたる
気はひにおびえておとゞいろもなくなりぬむすめ
たちはさはいへど心はよくわらひてこの人のさま
ことにものし給をひきたがへはべらばつらく思ハ
れんをなほほけ〳〵しき人の神かけてきこえ
ひがめ給なめりやとそきかまゝいさわくかな
うなづきてをかしの御くちつきやなにがしら
ゐ中びたりといふなこそはべれくちをしきたみには

えへしず姉乃人とてもなりたまはりあつむみなふ
あはてたなおかしうなほわうとそ又よまんと思へ
まどもさへぞやさらんいぬめの次郎かたらひ
とうまうなもいとおかしくんうくてこれ笑ひ
すをみせ世まぶいのていはうう まほふへうつむり
たらひあはずべき人もおもしまれてくれいつふつうい
うのきんふかくしなうびとそ中たりひよたわは
らんふあそまれてはいとくり此方志にさきんをふ
きさくなんわたべきなりくなためをやらんと思ひ
まぼうひ有りぶれしかう非君乃人志まぜおかしいとふ
さ夜のいとこう後をまうしくそい義ふうじとおもひ

アテキハヲサナ名し
アテ君トいふへし

志ばれ孫へふさうとりまと女房ゆまはゆかしきうす
我思ひの夜へそいでこはいもうとたちも年ごろ
へぬるよるべ我すてこれはともよいそさうあそ
きとひしはといふ兵部乃君といふ我ぞうひて夜ふ
あけいそく母よのわたる大夫の道い舟様ふかくへま
い義て四月乃廿日の程有りどりてこ舟とすふ
程よりくてふく浦々わあるおもとは浦いひろく
成てえいでたくびうさみ有りけまれしえそあひ
まん事乃かうき年を思ふ有り年をほうあれことて
しとしよみ捨ぐさ寄しともおもしくて松浦れ宮乃前の
あまさきなる婦はそとのおほ[illegible]をなんかへりかえさうれ

世抄 クリハラノアネハノ松ノ人ナラハ都ノツトニイサトイハマシヲ

浮洲名所ニアラズ只ウキタル洲ト云也

てうのましおわくらふ
浮洲浅瀬漕り出でてもりちやゆくとまりかぬる
さうこともあは乃舟
りさきもみえぬ波路よ舟出して風に任
かうきたま流とりの事きんちしもうは深か
路へわかくまげぬるよしなのはらいひ出つ
夜ばまゝゞつしぬかそでひ我なんと思はる流も
まのどひそりや舟といひてはまことりなんうゑへ
なわるれ思ふうさ比風さんはしえそあやうきまで
りしきのかわぬめの浅乃なさもなくらぬかすきぬ
海賊の舟まやわらんちいはきつめのとふやうまで

播磨国ヒヾキノナダアリヒビキノナダモ云リ 袖中抄顕昭云ヒヾキノナダハ播磨ノクニニアリ 俗ニハヒビキノナダモ云リ
摂津ニアル忠見集ニ 年ヲヘテヒビキノナダニシヅム舟波ノヨスルヲ待ニソアリケル 又勅撰ニハ備前国中ニ入 此日コソ舟ニハセシガイナキトル比治
李部王記云天徳四年五月廿日備前備中淡路等駅 備前使申云賊ニ艘 従雷音奈 舟航道疑入京 小舟ヲトヨリ来如来ト云也
花云カイゾクノ舟ナラバ一向ノ一モ臨ヤウヒ付タラバ思ヤウニ思ハントし

ゆうぶハアトニ云流モアリ 留ノヒビキニハ響ノナダモヲトリタルトし

川尻 摂津国ノ名所し

唐泊ハ備前ノ名所 河尻ヨリハ三日ニ行トしけ比九ニ舟人モウタフし

ブゴノ歌トカナニヨテモ豊後ノ歌トヨムし

我ヲカミト崇中思テし 又後ゆノコヲ思し

くゐなどいふ所はわ海賊のひとつなるらんよわも
抜折らし人のさひ来るまやと思はるゝ事もかし
うき事りもの乃こさはまひくよかんひく
きの事こも名のこなわかうはざわといふ所にちり
ばよぬめいふゆずはしいきいはぶんちする例の
ふかこどもうらどもまわよわかはしをすなどいふ
うふふ急乃なさけなきも我が身室住の浪を
はゆ道ゆかへしくうたひすさひてはふかうしさ
めこも忘ぬとて思へば多くおぼえちすてゝゐ
いよなわぬらんもつくしも力比ただ色小
思ふらうどもれうれのてきよきわ我をもしと

白氏文集 采原郷井ノ
不得見ニ胡地妻子ハ
虚弃指從漢攻胡
時漢人止胡國不
得帰漢軍敗之故
ナリ後又從漢討胡
之時止胡之人欲
帰漢也此時弃胡
之妻子然不入
彼人親國國号ニ
敵國住人也仍テ
両國ニ无便ノ意
叶物語ノ喩ニ

おりひさをひまどりしていりかくしなけゝくん此ら
思ふ心おさなくもかへりみぬで出ぬくゞありしと
はしんのどまゐりてそあさましき事を思ひければ
ぐるき心よまくかなのまゝぬ胡の地のせいしをは
むなしくすてくれど浅ぐ漢兵部の君きこえて
げにあやしかれわざや事はさうひきける人れ
きこゆ小も極りすがひてすげ出ぬしをいはるわりふ
らんとはまく思ひはゞ巻くる帰路うきとてもま
前といふ義はくべき義ひるはともあまき道路人といひ
をはべきよれもしき人も覚えばさてひと承せは
なあふよわごゝらの事おすまなまゝけるせうい哉

旅人出テ男シ
サシテ云ハ塩カイカ
ルズルラントヽ

市女

卯月ニ肥前ニテ

水鳥ノ陸古ヲ引ニ
不及只便ナキサニ
ヲスリ切テノ不ニ

すゝまそぞうらん浪風にたゞよひて思ひめぐらす
かさねしかの人をもいつかしまらんとすら
ぐとの義までおかゆまさいつくいきんとそいうき
へぬ此衆小せりしまさる人れおわかくはを
とかくひいそぐきやどわをさあ哉まて都のうちと
いゑども思はくしきく人のこゑはかくわまる
あらずお座きいちめの義人れなりふそいふをく
世中を思ひはゞ秋小もなわりまくふきうる
ゆくは義来しく義にとおかりわ世ばのすきといふ
なのりし人もたゞれる此くうちまどへはくち
しもつましくもなくりぬ思ひわはまの人をさなきを

おりふしよりんらんにもりしたなくんおきなくいそ
たちよきはれわりふりしきさびきうわしもの
ゆゑはいりきてにけさわもとの國りうへわ
ちわぬゆくゆくべき座うもなきをおくおとくおけ
くれなげきいとおもしがまゑなるかこみ丸はぬと
座ゆく〓わ人ひとわれ〓方にうんまわていはらも
いはちも〓りをなんりやうがあはれまし我尓
いやしき〓ひよなわても〓君をたのむもの
なうふハぶうしまわていなはちうちうきまして
うきらひなくさめて〓仏あうハさはべきかさにも
やくちびむまわ〓りめち〓き〓よ座りくの志とやい

松浦箱崎同社ハコサキハ筑前ハ八幡ト同タイノ神也
神功皇后ハ近國ナレバ紀モアリツラン松浦ハ唐ツキか
異天ハ同社ト云義
イカハ
宮ハ八幡ト箱崎
ト同社ト可心得之

おもしこふてもえらわおるとやはらひ　松浦箱崎おなし
社也りけれきを在ん〓〓はらふとてもおほくの所あそ
やはらひきし〓わかへわておくなんけふるしとえそ
まうわのかわたるとりやくや〓へとそ地たるさふ
まうでさうをまもうけわうちまほ人りいひいろ

五師ト云ハ法師司ヵ
亀福寺ナド六五
人アルトゝ何海ニ
八幡ニモ五人トゝ
〓ナカ観ノリニノ
知音トゝ

あてごしとそりやきおやのうらひし大とこの
かしこまはをまひとわてまうでさをまおうちつしだ

佛氏中ニハ初佛
花云長谷寺観
音ハ仏ト云ハ神ニ
對シ神仏ト云ナラハ〓シ〓ハ實ハ〓卅七尺佛ト云ルニ
佛ト申サンモタガヒ仍ルニシキヤト〓〓長谷ハ徳道上人建立十一面観音ノ像〓〓〓〓〓〓
代ハ〓〓ヤウ〓至法
界衆生ト祈請之由見縁起〓

てはは佛のおなのふいりはをなん日の〓のまちみか
おとなる〓はふり給ともに〓り〓ほ
我こえおんなわまして〓の國のうちふまうとを〓
まふのさうひとそもとし西〓ひはまいはすが志

ましてめでたき仏のてんとくいふしぎなることさらに
うちすわりこゝろさめたかならハぬこゝ地ありいと
わびしくくるしけれど人のいふまゝにものもおぼえで
あゆみ給ふいかなるつみふかき身にてかゝるよに
さすらふらんわがおやよになく成給へりとも我を
哀とおぼさばおはすらん所にさそひ給へもし世に
おはせば御かほを見せ給へとほとけを念じつゝ
ありけんさまをだにおぼえねばたゞおやおはせ
ましかばとばかりのかなしさをなげきわたり給
へるにかくさしあたりて身のわりなきまゝにとり
かへしいみじく覚えつゝからうじてつばいちと

椿市ハ大和國ノ名所長谷寺ノ近所
ツバキノ市ト云説ヲ 古来 紫ハヒサスモノヲツバ市ノヤソノチマタニアヘルコヤタレ 小右記正暦元九月八日参長谷寺 今夕参御明灯心
系代掌ニ終夜通ヲ布廿端仏明三万灯 今此物語ニ心相叶ヘリシクノシヽニアカシトミ

いふ所に四日といふみの時ばかりにいけるこゝちも
せでいきつき給へりあゆむともなくとかくつく
ろひたれどあしのうらうごかれずわびしければ
せんかたなくてやすみ給ふこのたのもし人なるすけ
ゆみやもちたる人ふたりさてはしもなる物わらはなど
三四人をんなばらあるかぎり三人つぼさうぞくして
ひすましめく物ふるきげす女ふたりばかりとぞ
あればいとかすかに忍びたりみあかしのこと
などこゝにてしくはへなどするほどに日くれぬ
あるじのほうし人やどし奉らんとする所に
なに人のものし給ふぞあやしき女どもの心に
まかせてとむつかるをめざましくきくほどに

四日後 子ヤ二人下人三四人ヨ上男七八人女三人(玉ト兵アト)乳母ト下女二人
ツボサウゾクハツボヲリタル装束ヽ清少納言ニモ云リ枕冊ノ内ノ春物ヘ詣ケルニツボサウゾクシタル女バラトアリ
ヒスマシメクノハイヤシキテイヽ
ヲミアカシ灯ニテヽシクハヘハ椿市ニテ用意ス
家アルジ 長谷寺ノ参詣ノ坊人ヤリ可然人ニ宿ヲカサント思ラルニ又ヌシニシラセズシテ玉ニ宿ヲカシタルトテ腹立ス也 女トモトハ主ノ女房タチシテシカルヽ
見モカナヨリ大ヲ玉祈ヲツヨク思ヒ歩行ニテノモウデメルヽ

是モカチヨリノ太近主行シツヨノ田舎歩行ニテモウテタルヽし

さてとむほかなきめさましく思ひとげ給ふ人々
我ぬこゝまてもうちよりなめわるしき女ふところよりも
人どもが男女かまどわけりんめくるよばひはく
ひきをていゝかへしくさみびやはしさゑかゝ銭をけ
なる男なみなとものおほしいせめてこしまやど

主ノ方々主ノ心ヲイトヲシガル云心也ニハ主ノ心ヲトアリ

はまかりくしてうしろの錢あわくいとおかしけまどひ
みやとわかぬんもはまはしくまぼろうしけまば
人くいおもくふいつわかまかゝらしなどしてかゝ御ふ

軟障 幕ノ乳ニや松ナト像ニ書テ壁ナドニソヘ立ルモノトヽ

かさはうきりよりわぬせぜやうなとうゑ錢へずて
おりし面ごのくふ人もおほうしけもおもひしつう
うひむかめてかさえもんはうひしふわざなゐい

手月ヶ太近ヶ日比初瀬ヘノ詣ノ志ヲ手し

くれ夜とないひふかくおもなるわんさ幸有り
うへてりしたる錢まじらひのほらふかくなわり
男をおりひなやかんそこのはてゝりなんたびく

例ナラフハ、ワコニカナミテ詣ケルモ等計ルトし カヤスクハ カルクシキテイし

まうでゝくるまのあかゝひりけまばよやすくゆきゆん
うわけまどの鞄よりわゆえんかさくそずわふ

軟障 ゼシヤウ ゼントヨテモ ゼシヤウトヨムし 太夫方前ノゼシヤウノ方ヘ来ルトし

さほ女母堂様のすきとなわのぎぜやうのわとり
よわあそ案わものなるへしをきゝてはうとわて
こまいは清まんよ案せ服へはるめんなどうしわあはさ
いとうらりしいさしやゆゝいふ物きくりまが
なかの人小かわしとおりひてものくたちまとわ
みたけぶさのおとこれかふしちらもちすゝまとは

三条ハ下女ノ名ハ
見エ玉ニ付京ヨリ
下リ又付テ上リタ
ル人ナリ

御かえずいとわうしまし程をしるふとわさる
えそやつきたまへばおもはくの岸へぬ流めかいふと
しもえわのぬるわくく三条こうめんとよび
よすふ女銭みまいまいし人なわこ候かさの君しも
人なまとひさしく候うまいわ舎まてうれかくき
程へわしは昆えりまてわわしものなわきわ也
えんおしいえしく夢のやうなわきうとおかきき
人はいとゆりしけきとら遊へくもあまへばおりひ
まひてこれも女ありとりん兵とうだといひし人も
さるまありようおうめ那君はおはすふのやとおりひ
とふふかいふ心もとなくて此なりへぞそなた三条殿

兵衛太ハ花ニ云今案ニ
昔ノ兵衛太ハ昭宣公
ノ召ニカハシ人ノ名也
此物語ノ兵衛太ハ都ね
分ツ丁ハ去迎ヲ見ルシ
時ハ付人ヲ兵衛太ト
云シヲ思ヒ出ルトシヽヽ
細ニ云ヲ後ヵ名ハ
此名先例有ヨヲ
案ルニ兵ヲ蒲ニテ
有ケル時太郎丸ニ
付テ姓ヲカヘテ兵衛太ト云ルカトヽヽ

カイネリ
花ニ云掻練ハ落江ノ衣
ノネリハタルヲ云ハ
イナカビタルトハ小袖ヲ
云ニヤキヌナドキテ
トハ上ニウスキ衣ヲ
キタルベシ　河海ノ
カイネリノモニキヌ
キテトミルハアヤニシルニヤトヽヽ赤キヲキタルトニ云かし

よはすまとくひ給よ心のへてとうかんかもこぬいとめく
しと御けゆふもちつきなわ屋うしてきぞ
おかしずこう侍まほくし内国よりくるときもうわへ
ふさはけすのかたをえらせ給ふべき京人よ人たかん
もや侍らんとてすわきたわぬ中ひたるかい錦わよ
きぬなどきそいとふるいとうふとわふくわ我よりひも
いかくおかくてりぼりしけまどな殿さしのうなる
我かみさうわたわやとそてあかをさし出たわこれ女
てをうちてあかおもとありまうおりしまいしけまゝ
はなうれともうれし也いほくよわ条わ給ひかふ
かうへいおりしまは屋といまおど給くしくなく

まうきぬ窓ものそへなれし世をおもひいれたる小庵ぞそ
あまたは年月のうへらまそいとはるかなれまは
おとこはおほいやうの君はいつくなかれおもしあそ
きとかたしいとそ君の御すかたはいかなるなまめ
世をおもふりあくなくもやいつむとそのかんも
ゆかしくそいひ出けれおもしまはしまのはかにおしこぶ
かくなんと聞えんとそのぬかかみまそ後の人ち
もひるかおいとはらくいりんりとなくおもひきこ
ゆふ人にあいめんしぬべきことよとそはへてて
りまわきふるけどをも庵ぞそはふ月なうぶろ
まれ名おふかくなしおかそまけいひやはへきうと

瞬 ミタキ
瞳ノ人ノ力

なくなきうはたれい人いたゞけの君はいかゞ成程
おしこらのとしご後髪もそもおもしまさんみをを
らん時の大臥拔の御まどけうのなは世宗中そ風の
をとまてもえきてはさんたそまほらぬなしいうしく
うかしと思ふりおいのおのおわとふまわきるも
いとんうきまどまちすそまわ竹へ夜まの君のらう
まく夜ふそれをしあまよみちのかたりまそ
まほうひきこえてなんまうたふ侍るゆうといひはゞ
くれば昔うれおかいふりひなりまりしとよわも
いう庵んるるなくまはうけしと思へどもいそや
まもそもうひるゝ侍からいとやうりうを拾ありきと

三人ト云ハ上ニ云シ人 トアリ此義イカヾ 乳母三条ナルベシ

日暮方ハ堂ヘイ ソグニ成

いふまてよ三人なからむせかへりいとむつかしく
き義り日くれぬといそきたちてみあかしの
ことゞもしたゝめはてゝいそかせはなかなかいと
心あはたゝしくてたちわかるもろともにやと
思へどかたみにともの人のあやしと思ふべければ此
ぬしにもえうちあかしのはまたいひもあへず我も
人もはつかしくてみなでたちぬ
右近はひとしれずめとゞめて見るに中にうつく
しげなるうしろでのいといたうやつれて卯
月のひとへめくものにきこめ給へるかみのすきかげ
いとあたらしくめでたく見ゆ心くるしうかなしと見

花云ノミヒトヘトハ何説ニ 為衣ト云ルハアヤマリ ハキヌト云ハウラアル 名ヘヒトヘト云ハウラナキモノ也衛門内侍ニモスヽシノヒトヘ二ツアリシナジズキヤクレド ノミヒトヘトハカタハナドモ不見ト見ユルハチリヒトヘノイトダヘメリハリヒトヘノ エニノシヲカケシバ ノミヒトヘトヘ名タル ニヤヤミノスキヤゲトゾルニテヤウモナクヒトヘトハキコヘ 此時ハ初瀬ナレバヒトヘメリモノトキシ面白手也トゾ

右近ヲ見シエタル人 トアリタルハ菓子タレ 民前ニ歩行ワケタ ルト云ニテし

すこしあしなれたる人はとくみだうにつき
にけり此君をもてわつらひきこえつゝそや
おこなふほどにぞのぼり給へるいとさはがしく人
まうでこみてのゝしる右近が局は仏の右のかたに
ちかきまにしたり此御師はまだふかゝらねばにや
にしのまにとをかりけるを猶こゝにおはしませと
尋ねかはしていひたればおとこどもはとゞめて
すけにかうかうといひあはせてこなたにうつし
奉るかくあやしき身なれどたゞ今の大とのになん
さふらひ侍ればかくかすかなるみちにてもらうがはしき
ことは侍らじとたのみ侍るゐなかびたる人をば

法師玉ノ札願初瀬寺ノ事家ニ云長谷寺本堂ハ東向ニ少南ヘ向タリ 先僧次第ニ仏ニ近キ 局ヲ云エルアカラ 子ハト云ハ下局ノ僧ノ心ナトニ 花云ソノシヘハ今日初テニハデタレハ 御師トハ云タルモ未志フカヽラヌト云ヘトヽ 花ノ説イカヾ只玉ノ師ハ年ワカキトミユルし

カヅ〳〵トハ大方ノ心ニカナトモシテ見ニハナシトし

かやうに申しかはしぬなま物ともの はなはだしくハ
さうすゝもうしーをなかさかわとそ物語りして
せまかりけれどおとろへくしきなこなひのまの義をま
かくはしきにもよ我ほとけなみまゐる右近と
心のうちにこの人我いふぞたづねきこえんとや
わかれけるよりぼくくてみまほしけれバ思ひ此
じしおとゞの志此度はまらん乃法ん申しあく
めしにきまゐてさいあい給ひまゐらんなど
申しく我かくわぬ中人おほくまうでさわかしく
法園乃かた此小方もまうでたかきわれの絶しく
い義在ひたるをうつ唐こさま此三条がいふやう大

大悲心者ハ大悲薩埵トムフハ三条ノ別ノ一シハ観不中大ニノ小ノ方カ又ハ大和ラノ小方ニトし

ひさかはしくやさうじあの般若大斎此小方
なれびハうこころの密かの小方にあまらん三条
らもすいふむりはかへそこのへわやしハはかりてまつる
らんかうひさいにまをあてく志しへて我仏右近

白氏賓ハ日本紀復命

いとゆしくもいふうおかる笑でいとくさうまう
丹おうびありけきな中ねとのハ世うしよ此法おはわく
ごまいゆのうおりしましきれにはあのまつさを

以上ハ南宮内府十七モ三条ホシリノ仁ナノ宿ヲ云相衛し

法んよりけ竹へは大法まてゆのたくわはりしき
法なのよ法かさしもにわ唐うのめまで志れさる

アナカシニシハ大臣トノ如ニハ臣シバラノ三条ヲ如ハ我ヤテキカセシト云テ二(?)

まのわでおりしまさんよといの惣大法なり岐竹へ大法

花ニ八幡ニ対シ松浦八口崎ト云長谷ニ清水ノ如寺観音寺トニアリ初瀬ノ作ハ作ヨシナキニハアラズトニニ満誓ガ観音寺作トキノ語ロしトニハ清水ハ立派なしナンゼンノ国し

三条内

たちとさまはしまで大斎乃みてさち此うへの志乃の

カトブサメテアシカラ山ニ杉木キリ木ニキリヤケツアメタラミホヲ

乳父右近ノ願文ニし
王ノ爪ノタメニ尹セタルヽ
俗ハ羊十レテクダくセ
ホ云纪尹モノトし
ルリ君ハ玉ノシサ十色
レイト云门ニテノ前ニノ
ちぐとカ玉ノイ一ノイリ
タル丁アキラカし
花云李部王记
延長八作願文延
祈長谷寺観音
願ハ爪病平愈將送
白檀ノ観音像奉
鏡一面灯明十万灯
今ナ安ホ父谷门ハ延玉上
爪ノ時ノ爪丁トこ

みてらの観世音寺入りあはひしい義なるひい
えうどのえ日さまやいなときあはなむしく津巻とて
物さうにて在り義しなさずおがみへておわぼくしく
人いよ日こもらんとんさし給へ里右をいはしも
思ハざりけれどあらあつ弁で乃どうの小ざえんとて
おも給へ義より大徳すひていふ法（和文）わりしぶ〻など
うおたるんりんへなどさやうの人いくざくしう
わ義まん　へうまばつ里のこしまそまぬ乃ぜちりう乃
法日の君といふが法たなあふ奉るよくい乃わ中給へ里
人は法あんえなわいでさあす此祝もりさし奉京
べしといふをきくも先なわほうし（法師詞）いとうしこ家

すうれたゆゑなくいのわ中侍従しふあう
ねまといふいとさはぐりう夜ひとよをこなふなわ
法巻ぬまばいま津法（右近か祈ル坊ノ或）大徳此坊ありわぬ物後ちう法
やすくせなる庵し姫きこのいさくやつま給へ法
まうりけるおぼしたるさ日いとめてたくこそ遊
（右近）覚えぬたりききまじらひそしておふくの人をなん
えあはむまぜどのくうへ乃御かたちふくふ人おは
そうとなんとしう御み奉ときまさおもひ出給姫君（明石姫）の
法ふ日いとおとりわふめでたくおりし日まこうし
法ふ奉わ給さ日もなうひなうめやふ入りおう屋津ま
おへ法さまのをとわ給まじくみし給いこりわござう

蓮モ紫ヲバスグレ給ト思百ナラントモ云ヘ前ニ赤ト明姫トシテノフトアル所ニハ紫ニハ紫トシ紫ニ弁ノ色ノ詞タヘテ(?)紫ノ蓮ニ弁給ハ似合ト云ム天人トシ

なんばくの君ちくみかどの御時よりうつく(?)庭の
女御がたあまたおはしましけるなかにもすぐれてときめき
給へるはつめふもうぢん乃御母君と申しし(?)が
姫君の御ちやうちと我なんとまれ人とこそまたを給ふ
上やおんと此かゆふとやまし給ひまわなうかるよ
り此おはせし宮をたまはり給ひてえいびあまいきようり
おりしまさとまふすこなわまそおいはきさきとなるし
りからせ給ふへのはかなきは我給ふあのびかりむ
となんみ給ふとのをすくまたわとあげしためはをを
こころよせてはなふうへかぶりのうちよせて給ひりん
我がびたまへはこうきいおかけあげまどなん

楞厳経云世尊頂放百宝無畏光明云々花多今来云仏ノ光明ハ眉ノ間ヨリモ又足下ヨリモハナナ給フ全身ヨリ光ヲ出ス光ハナキトシ其中ニ頂上ヨリノ光ハキヨリハ十ナ給光シ人形モ頂上ヨリギリアルモノトシ

たましまきこし給みにはよ宮のおはさ庵ともを
みさはたくひおりしなんやとなんほひつる山
いはくけをとり給りんおいはかおはおまかばにくま
給へるもとそいまさきをり肌まだるひとわやいおは
はるふでなまをすふれたわとくきのへはなめわ
りしとうちほめんて見をまだれい人もうれしと思ふ
あるあ給はりまをやどくおやまきにふしはめあわ
ぬ庵うわしにあたるしくあらしうてあのまどと
捨おとこをんなのそれむべ義子とも小もひおおて
なんかへわてまつるぬよれんちすゐ京にまうでう
わがおもとりやよきよ庵よ兄ちひ我ちきこしたまへん

アカシモト右近ヘ杷羽シ色云付アメリハ影暗ノ所ヲ見ト云テニハ此付ク所ノ付ク扨ニヤハヤヨキサニト云ホヨリサズニヘラレタヘトニミノヨキ人トミ…

たのきさんやばりんしたまふ人は色のはづゝゆゑ
ましまたるたまはる也し給ふらんちくおとゞこ
きうしめされうぜまんしきまへ義たなうわおがし
おまんとといふ玉うしうおぼいそうしなむき
なへまいそでやみこう数なる給はおまへちうくめし
はりたいを給へばものくおわごとありいうふかうせ
給ひよきんとやさいはりの残きくうしめしをきてわまへ
いうでたつときこえん心う思ふを弟し出来わうう
けふさな世の給いするといゑはおとゞのきこえいめで
たくおりしまいともさほやむごとなき御めども
おえし成すなりまはまことのおやとおはいうふ

おとゞふ悲しうをまわ給へなどいふ小おわしはま
などうふわいぞくす小忘まがさくうらしきす由へ
うんおかりてう此御かりをよえんまらん字もはく
なる義がさうくしきよわがこをふうとあはとん
心は悲しきそとぞ此うみよわの給ふなりお給の
おさなうわるふあといふよ経ばよりのばくまいうり
し雑すてえ給ゆも残こえで色しかとよお義よ
成給へるよしいはかよてえわふさまうわれしに
とのふ余わ給ひしゆかのみまわしゆえ此くて
ゑこありきさわとも非君をうばう此はわしゆ魚此
血泉よとゞめ給へらんとが思ひしはないかゝやや

長谷寺ハカケ作成改し

観音ヲ祈タカケタルシルシニテトナリ今日長谷寺ニモウデズハイカニシテ君ヲミシヤ
古今 初セ川フル川ノベニ二本アル杉年ヲヘテ又モアヒミン二本アル杉
六帖 祈ツヽタノミゾワタルハツセ川ウレシキセニモナガレアフヤト
古今 ヨシノ川岩波タカク行水ノハヤクゾ人ヲ思ヒソメテシ
何モ同心ニヨセツヽヨメリ
カタチハイトカクヨリハ玉ノテイノ
太迎ノ目
ユーナクモ見トハコトヽモ云フ事ヲ見トハ女ノキフシ立
玉ハヨクシテ立似合タルテイイカニシテ舎中ニテ見ニシイ立陸ランシトシトゾハ外ニテ後室し

母北の人までおりし給ふしよなどうちかたらひ
侍りし日むとひかへし物語せんじなどし、つゝ宗わ
侍ふふ人のきはまどもみなぎさぶくかゝなかわきまへ
しわりける初瀬河といふなかれわ右近
ふるさとの秋れうちどを聞えいふる川の辺よ
君をゆんまーやうましさせりりと紫の由
り侍せ河りやく（沼ヲ初リ云リ水ノハヤキニ チヨノリ）のすハしく孫ともくふの
金瀬よおさんなりしぬとうちあまておはひぶはま
いとめやひしぬかちはいとかくめでさくききよげ
なりしぬなのひきちくしうおはせましうが
はりふ玉のきはなのましいそあそれいうぞうく

おもひ出給ふ侍らんとおとゝをうましく思ふあやしく君は
さていとまつ座のりおはとおまて座ハくへとぶ
たゞ座敷へまいらごまいるとうくもてなしなど
そのしけるよろめきがちへまはくしをんかまく
思ひなはよろ給ふし人いちとひかさ孫をとんえ難く
あんくはまどはい豊かのやわてきるの日もなこあひ
くろし給秋風皆よわてくるすか小美のやわてにと
りごうむきうよ物いとおなりふともよは乃侍思ひ
侍けらまて人かんくなかんしともわかうさき
すと思ひ出侍れ侍るをば人死物後のつ手でり
おとゞのはおわさ座りしくのなきともはかりこさ

カルハ下草 玉ノ自カヒゲノ羽し
万人丸 秋宵ノ
ノキノ下草生ルモ
松ワスレ草ミレド
ミゾラヒズ
大和物語 カシハ木ノ
杜ノ下草ヨヒノ岳ニ
カルオモヒハアラシ
トソ思フ 杉門ニ
引ニ首尾ニ至ニハ
アハズ

はら子どもられ給ひめりしあそびをさゝげばかり風さえさ
くきたのもしくうれがりしなわぬるいはとてもうし
みふやどはあるもどひのハしそりみとひまのどり
ふうんとよむもあやうく思ひなりたる近の御ハ六条院
ちうずわらわなわなれば雑と成りうでいひうふいさも
さはきいて成ぬはむもちーなはる右をハ大殿より
条わぬこのことをうけめ成ことゆるはのでもやとて
いうぐ成なるなどひ美いはしまわ思ひひことゝ
ひ後くとしてまうで条除車おもくゆかふかきさ
なりで立出るもまいゆきちちもける玉の屋なわ
すれ歌ハはまへかも条うで思ひかーさわまるの

召ニ此ハ然ル前ニ家
巳ニヨヘ退キシテ
今稿余リ人ハ女房
タチナトデ云リイトカド
オトヾモ是モ然ノ
前ニテハ巳ニ別ノ
所トアリイカド
コニヤハ ワカヾ迄ニ
万人丸 松客ノ
ケヤスキ 松カ天ナル
スコニアリ君ヲシ
ニタル
七日ノ首尾叶ハ
ハウセニ三日行例
四日
後ヌ巳ニハ除ケノ所
許トニハ但然除
ニ入ノ云ニ成

日まへさとよわ条まはよ庭うまの人も有のなうふ
とわかまて右をめしいばきはおもたくおほゆ
おとゞもは語んじてなどかきぬるいくしくた
はるきみ丹なりやめめ人の御あたがんおもまうへは
為うもはわしおもしき事などおわはらんなど
まかりのむばうしうふ侍ふまめとなど北おふまうの
でゝなぬうは成りへぬめ任とおとし美うしゝいは
かさくなんもまふへし侍わて家なる人はなんる
まわばきたわしなる人ぞと思ひ竹ふかと成こえ
いでんもまざうへりきうを辛うでとわわ成中
たるんを北ちふきて給てはへざてきこえなわなと

やむごとなきおりひとつゞきに参りこえさせ給ふらん
とて人々参りあつまりやさしはかなく心ちなどし
給はてうちとけ給ふびおはし給ひしあはれはまさり
いと見るかひおほかる女君は廿七八にも成給ひぬ
らんうしはかなく我よりこ宰相ひめ君わ給へるまし
ほうしゞにて見まほしいふその程ありあるかなほひく
ありしよりけはひはけ近うみえ給ふ人をいとめでたく
我ともしとえ思ひわかしまやうなく
なきこさいまいのはわとなよとは備わるべきわざ
すれとやんわはせし御わかとのこともこそ見ゞとは
何し給わりめでたの貴人いはるゝとそもほゞは

めわ給としころ過ぬるどもちょうり心うかしてもほびよ
うわけ近ふ見えかへば人々志のひでまうふさわや
たまふう見ばうひなるひふまりむをぶむつかしうむ
う御はなきたちまちこ心ひひかる見給をりつるい
しきになどいひあへ里人は事逢ぬふどもお
とけはぶいかるさもほうわ給りんとやさふらはましき
んとこまかあやうしなど心近にうらひてわるひ
給いとおひきやうほさありしきけさへうひ給へつる
いなはおかやをるほりへいかし我はいはする
にもおるぬは方にて世中のど座ありおぼさ給
ましうたてなる我はさはまうす我のくまひ

おかしく人のんを見ん為にはすすまはおかしおかる人哉
さんかたを事路けんすまいでたわかんやなま
さ海乃人がさうときは我やう其うしらひて井で
きるはうもとひたまへばはなみくはしやれなく
我し路より夕ふかの露路乃御ゆうわをみんみ
為へば逢たわしと我ゆけよ来なわるる事よる
としは路はいはくかうとの為へばあわ乃まつかば
きさえふるくてお座し我山はとふなんむし人と
うき海にうはらでなわけまばそれ世の物語し出
物思てえ離く却りふ路へるをしなどやえぬたわ
よしんまんわ路りぬ清あるつまりとうくし我ぐえ

為へばまんはなまきうはしまふ我小きいは
べくもあらぬ物をとて衣袖して涙ふきて我路は
あうちかどいうそれせうしの夕魚ともとらし座など
それ路へはすふらびふしもいりでうものし路たむと
おもひ為ひしをまつよなうあうおもひまふわてみえ
為ひしが也我こゆまへばおもしのうやまりわ
かうのおがゆこみそ君との路へばいうあでかさまでたと
我こゆまへば思ふわかがありうる思ふ座けま我ふく
たうばたもうし路座くうしとおやめまその為ふ
かくきてうあてのちいめしたぶちはさうがれ
人それわうわふわるいまうんとしう路物乃つ井て

サエナガラ オトラザル事又右近ガシラセザル事

あさましくくちおしうまどはし侍ることをわれおもひ出
侍るにいとうれしくなんいそなかりいまゝでおほが
侍りなさもうひあふしくありなんちかくおはしますは
なりけりしつらまんいとはかなきにたちさはうるめ給ふ
ひなうでゆまのりしめたちまじりまたらんかなり
なかなかうきあらめ我はうちくしきあり
おほえぬ所にわたり給はいりましし
はゞかりのどもの心はくさはうきりひありていと
いうつまそかさんなどうらひすゑまいてうはぐ
いとうれしく思ひはべりたゞはんかなんおとゞあり
しらせまいらんとかたきうはつる道なめりし給

トモカクモ源氏ノオトヽ云 又内ノニ云 侍ニモ源ヨリ外ハナキ也

りんけるほどにかすぎ給ひしたまひしかりわまほ
とものくにゝ残りたる住うを錯りんさとうは侍ら
かなまを給ひめとゆ池いてうもかなちなさうあと
ほどゐになりこなみさまとせへまてに通小はつか
かわかに給ひ契となん年は思ひわくさ給かくて侍らん
なるかとくの中小めれおわれ心ざりわれ思ひ
とぞおもる人にかわしをいのちなかくそわがこ給
なずかさにみ給るたぐひおかりんめ給なかないふ
かひなくて世をかりわ我うさみふかへるはくちおしく
なん思ひまひふかく時なむありさてもの し給ふさ
いとうなれいかなふんちすべけまとそ侍そうう

ヤソキコユルヲトヱヨリ
ケハツケテミルヘシ
ミクリハ久安ニ
ツルノ長キ事ニヤ
ミクリハ節ノタエヌ
トミシタメヘシ
ツクヘニ生ルミクリノ
水ハヤミニダ子モニ
ヌニ人ノコヒシキ
ながヲツツニ江ツ
ミシニ江トヨミヤヘ
タル一過江ノツノ云
江ニミクリハ生ル
ながし長キ物ニ云ダ
子ヲミストヘ玉ハシ
リ玉ハズ氏原ノユカ
リニテアルゾトヘ

まち竹のみれはこはむ華れいふらひあかりしを
おほいどのばかまりしはえてあひむたる世
ひとのありさまかうしそめてさてまほにそのうしお
ゆりしうおほさまゝにあはれのまゝあはれのにあはれ
遊りしまうふ給てりしようくゆるを
まうすともたまでまうらんうけ給はにおもふ
みくわのすぢいたえし遊びなんあはれきこえはべ
みはからまうでゝ入給ふさなどきこゆ御ためさう
すくくれまうなどさあくかうへまもかくさらひ
きこえ給へなはべしてくけとのあはれもまう
けのとのめしあはめていふあひしさあなどきこ

なにことえしを竹へまいらばかりひさしくめどもまほ
まうしてめでたしまほしきさまのさまであん思ひきこえさうしつれば
くさのいみじたしかりつまでものゝおやのたけりひ
なればよういりまじりうるめかでうらしうぬ人なれば
あたはあはれまじらりんとおもむきそくるしけれ
あからしまさはしるべき事はまぼをさきこえさせ
人にもそのはらからで人たちなまひなばおほくの
君もさばかり思ひきこえ給ふなんおほやけの御契りいとえんて

両説左近中将ナラヌ
カナヒ氏原ノ…
ル仏神ノ…
又ケカ神ヲイリ…
中ニ玉ヲ見…
トシニシテ…
中ニトシ

やまぬ物也それを何もかもすりのでかはる心
しはきらまんと思ふ竹へしずる仏経のほどりち
ひはかりはるやましてたまもくいあいしうのふ

おりしものさびしうれしくすぐすむまほは遊座と
せめておほせらるるいとことよなくぬなのびやかん物
まとえほのしくおぼいかわりのかとのいとう
りきなとわいでくおくせ東宮（唐御）
（王）うはおくぬみ（カクモメセ）くわやかりのすぢなまはうき（附侶ノ一し）
（イサヤ二人ナカクトメメルル）もおく孫我とこめなんと乃こ所のかなわてい
まうれだちてよ殊がりしけれどおてえつまでくち
おしかくしばは（添）んおちぬかくわすこ妙べき御
うちは貌ける小（第ノ町）飛み乃まちか老いさほうなる
あれどもなどもあしいきかひなとかはこみち妙く
まぶけあうる人さげくもあは座中宮此おりし
頭證 見證 イナ氾 キリし

文殿（フドノ） 書物庫之
まほにはかやうのひとにすすめぬべくのかけ座す
なまめかしさそさふらふ人のほかまやさてかくはさんと（中支ノ後堂）
おほしてすこしむもれたまへかしとこのまちの（花ナル里ノ示）
あのかみふどの（文殿）のみそあるをたとうさへうけしもと
おぼもあはひ色えも思ひやうかう殊よくりのしら（花ナルドヱト）
御かくし給はうちょうらひてもわわなんとおぼし
まことはかへ小もとさうの此ましせうしのよ此物語
やはりそでおふ人座のく御心ありきもあおうしとおわ
人の我うるみやこおふまわあしやよ小かき人のうる座
とてやどれすうるわいおとむむあしるつ手でけり
へ女あぬう人さはことありおりひ浅くゆまとそ

花云夕貝、不生ナラバ切スエホドニハトノ1卜左ヲ忘ニモ前ノ詞ニ見タリ

いふも萩なとおかしけれ出るひとのうへまてもはかなきた
うしよりと思ひ世中も女といふものこゝろの外を（六息是ノ下ムニヤ）（シモハ又中モ思中モト云テニハ也）
（有明ミ下）あまのこゑきこえけれはさゝらはすまくしまめさら猶
いはりしとなん思ひし我ものゝはかなさはまし(こ)さ
をもはまこらしなかよわされとひさしふるもらす
たふめしいまたゝひなくなん思ひ出ら給はすふ（夕顔ハナドトヘ）
あるまじうはかのまちありまかす人のかたんには
などかのみはなりまし人のあわ猶とかくふかなせまわ
きゝうたくまきりありしさ心ちなとはなくれ給ぬ
しかともあそはかりらうふくもはかなし御
などの給ふさわともはかしのなかにはたちなる御（切スエラナリシニノムニヤ）

市女花云市女商人トト上ノ詞ニ見ヘタリ白浪モ又日ニ又日アルモノヲ市ニ市女ノ夕、又日ソナキ　今案今ノ世ニモ宮仕人ナドヲハヤウルアキ人ナトアナタコナタヘ行カヨフ禄ニ自ヲ付テ中ダ・ナスルタグヒ多侍ルトネ、

給はさうましとの給ふか我きゝたるかことにをはゝめさ
ましとん逢給へる姉君のいとうつくしけにて
なまんもなくやせ給からうけまはまさしとらわす
かしとおかしうへさぶらふいはん九月の事なれ
るわわ給りんうとほのくきくもいつての（六条ニハ紫ノ）
あるむすめしきまゝいわの人形とりとめさはつ
うしまていくちおしうぬ人々も京すわち里ほひ
きゝなどをたくわふ侍きてよひわけめなとして（チリニミシ素トモ）
さふらいをしき猶ふまとひ出給しさはなまめかし
我くらうしてはまいて又人ともおし京はそのはかう
月給残とて猶なまいはちめなと座うの猶いとよく

玉ノ浪ヘヲ花ナル
二枚給し

シテナニ数ヒトヨムベ
成人ナリテヲウナ
トモヨムナモ八ヲ云
ニヤ

タキリシ枚メルニ
ヨク生立タルトし

わとめ侍く井でくる此人の御子なとくハしくをせ
ざわくわ去道が侍とれ此五条小きの侍のびてわかうし
まゐりて人くえわとくのへさうだうくとくのへなどいづら
して霜月ゆゝわくわ娘わとくひんがしの侍うさに
きこえまわ竹に翁と思ひし人のりのうくしして
はりなき山里にうれぬにまほをおさな義人おあわ
しりとし侍を人ま遣たづね侍わしりの世えきて
いぞなん女になるまでよそほをおぼえぬうさ
よわなんきて侍きよほとおぼりづまもとてう侍ほ
り侍るなわりしもなく歳に為わ中ねなやましつきを
たるりなしくやハあほおぼしてぞうしほゝ給へ

山がけめきておもひいでたまがひなびたるすみか
からんさほべくしとありまてもしへ給へといひと
あまたのよきこえ給はからほ人此おりしけるを
まり義くえざわけるよりあまのひ定とうほものし
給ふかさうしくまきはよ義あとうあれとれひうきめ
此竹のはおやなわし人いふなんおかごきまで
よりわし御心もうほ度にく思ひ嘆き給ふまろ
などの竹の娘きくまうしほむ人なともまうと
相かりってつきしくありけるをうれしりの御へつき
まうと小なんとは給ふとのくうちの人ハはむもあめ
まつでなま人数み程嫁出給へほなゝんむはりしき

古ヤアツカヒ 已ニ 太ヲヤハカトアリイヤ カ末 定ノルイニ於

みるもののあはれかいふなといひきわけ車によせつゝわ
しても人のほとゝもなと心をあまいかみ給ふひに
まいそふわとのよわけあやあまくれと思ひ給へは
うれ敷座そそおとく乃きをわつる所へまもりし
むつはかんしなといふなくきてわつらはし
わか上達部あらぬくまさ小さしも思ひきこえ
ぶわん所をほれすなおほかとかふうり見ゆ琴れ
かこはひよわたつうふ見まほしとめはしうかおう
ろくさんうおほゆるやう音給かさのとを心を
おいたなそはこのとくちかいふ美人はんなとか
こうとうちわらひ所そひさしなほおまりつ給

掩放 戸ノカギヲ 源氏初メルホカハ ケサウダチテノタマ フシヤジュノムニノ タミヘルタメムニ詞ヘ

ぬ所にて火いとほのかにけさうびたる人ちかうまいりかやの
なかにはいまいましきもののとさうきけさうもおほさぬおとこそ
本様にしを座ほ給わわなくおつうしけまは
うは見ておはいふやうあんなといとめやすくてら
ほし見えきん座あまわんふくしと乃給へは心を
よくそそことしらほおもかの人やとほこしわつらひ
給ふけよからおほゆ所はまあんのまゐりしけきあわ
いはうりもとし人とへきてあまさ程ふもの給ひな
さほいふしくおやめきて年ははり思ひをまつて
んふかけぬひまなくあけ者ほ心かうてあんまゐり
侍きても後のんちしてあまうきれうとともとわ

火ホノカ成ハケサウ 立タルトし 嫁娶ノ夜ハ灯ヲ遠スルワサ

カソイコハイカニシ思ト玉
思出三ニテニナリヌ
アニソメスシテ
三ノ町ノ給
トシヨソヘテ

うへ志のひかさまえなん実えられさりしをとて
はゝ地のこゝひ給ま志らふかうかりし出し給
はとの雅かうへ給てなやさのなけれ多くとし
へゆはたくひおしりの姿里はゝくもおわれ給
うちこいまれうねくしくわのひ給へき法なと
小もおりしとふしこ後の源物語なとも多く
城はしきまなとのお法はのなくすさうしみ給ふ
我にえんおともなく所りしそれはしうてすし
はえうめ持小ろろちなよしとおあはのな義か小
あんとかのうふ我こえ給ゝ属ず番人りいとよく
物かえてまりひたわたるほしゝてさほみ給へ旦

兵アノ玉ヲミテ
心乱サシテ凡ル
トし

かゝる被はうまとも云ひ又逢うはとてんたへいふ
うひなくいおろぬはいろへとおかす古道りける
べき義ことのはりきてわろ給ぬめやすくみえし
給ふをられしくありてまへともかろ浅きえ給
おはしうはのなりの小峯へゆきいりいとおしけ
なりんとはなつわし城の庵里て心を候うしき
まそなむみゆやふかゝ給物あわ世いうて人り志ゝ
きて苦部への書などのこのまゝのまちこえもし
うま給ふんみざりうれほ物どもれいとうは
はしまちくのこえわりわ入りこゝのはものぶ給
ものくきまひのなき雅なる以てりもてなして

キアラズ アハヌモ
心ウムラサメヌ人
ノーし

つなき哉うちそあらぬ人のくしまみあはせんにかられ
姫君はおほ殿の人のおはしませは人のむけに侮さむ
らうせはうきたりおほかたよそしくはかなき乃たまふ
まことに小君をよういふかの心なりきつのはさまうよ
もてあつかひてさはりのわけはさいとむきんにさふし
さしわざうしとてまことひ給ふにおもてあつみて
おはなるいふものくおりけなりわざとものきよを
給ひてまかりにけり

無鏡集 イツシトテ
尋キツウニ主カコラ
我ハ昔ノ我ナラナクニ
タラ之侍従ハ前ノ
心ナレ兵実父コノ
尋ニ給ニトし

恩わくこともハそまてなきかうたまうはらいものなか
すかたを見きはらむ後と座かてひとわかちたまへは
さきなふうえおはしける人の名残をしめわとみたまふ

侍従人
私云前ニ明ヌエホドニハ
思フ百セジトアルニテ

中将乃君はものゝ侍人をさふらひ給哉うい
してむつびとふらへとの給ひのまさなくにまうで
すかひて人のかなるほどもおさふりふと
まはめしよせへくなんなきさはりさうとのほとにも
かいかはかりきはらざりなくそうとしいふまあく
さうあうえたまへはかさりかいたさまそんしきは
人は思ふもんのあまかはらしたかしけはまぬあわ
しうかもあさましうぬなのひたかしもあとしへ
なくて思ひくうきしはくやすき侍らひよかりしめ
いかぬかしうけふりくそおやりうふいちもまはひ
さきこえ給はさかかりこちをかりけ給めもあやにおは

ツクシニテノ家居

コナメト八花ノ住ヲ東ノ毛内ソ西ヲ二玉ハイ從フヲ云

ゆふにしもぞ三条も大弐をはなばなりしく思ひ出る
ましてかんがいきざしけんひ思ひ出るに中／＼しき
すぼあしぶこの正意の心ざしへ残あわすこ残りの
ありて若もわかりしあひ高王も思ひしに本かおびすあるい
あとしもなこかわぬ應ししとてこなきのければいしとも
さざめのべ美すきおもてうを路ふ殿らのはきも
なわぬとしは丹ふうびき侍みたわしんちふりうま
みおなくりのでの木わまでも立出入るべ美らはが
なくおがえしむほとのくうちとあさかえり出入
なうし人をまさざんあとをこなふ万となまきは
いましきめいかくとおりのくわおとくのさこの清

カヽリモ前ニ玉ノイカメキタルヿハナキトイヘモモシヤト

んざきてのこまのありわわがくらうおりし城さまと
いとさしけぶり岸はくれゆりはしき侍らひの
あと人くはさりがくなど座んことな義はほうあり
おかし歳きてたるかくわか丹飛うびたるすやと
山がはのほとりにはなづわてまありわ告きこえぬて
てうしー路もこそまほわ路はいそでありおわりの
ともの中まさくくとてをほくしてを里ほくもて
城いまほはうなすがこうちきの色にうまくくなるに
法わ流ほるりいとおかうわくほものとくもうれ
うさくふうし座こなくくうりのすべりわけはまと
うへふきさえ路へいざみをしけとのふほおうまほ

打殿 打ヲ云装束ヲ
打ホス打殿也ハリ殿
ヤトアリ男女民ニ
装束ハ打ノリシテ
トスル也イタビキ引
イリ八略也

まうもこなたにせさせ給へるもみなとうでさせ
給へりかゝる筋はたいとすぐれて世になき色
あひ匂ひを染つけ給へはありがたしと思ひきこえ
給ふこゝかしこの打殿よりまゐらせたる打物
御覧しくらへてこき赤きなとさま／＼を
えらせ給ひつゝ御衣櫃衣箱ともにいれさせ
給うておとなしき上臈ともさふらひてこれはかれ
はと取くしつゝいる上も見給ひていつれも
おとりまさるけちめも見えぬ物ともなめるを着給
はん人の御かたちに思ひよそへつゝ奉れ給へかし
きたる物のさまに似ぬはひか／＼しくもあ

我姿ハ鏡ニテ見ヘタル
計ニテハトゝし

花云エビソメハ面スワウ
ウラ花田ヲ云リ
今様色トハ紅梅ノ
コキカタニヨル名也
紅梅ノ文ウキタルハ
ウハギ也今ヤウ色ハ
至ノキヌノ下也
桜ハ表白ウラエビ
ソメ也カイネリハウスキ
ツヤゝカ色ノウツクシキ也是ハアカシノアヤノハリタル也
ヒメノキ料也
トゝ已云紫女ノ
キルニヤシサゝキ上
ラウノ上ニキル 初カ下ギノ衣ハ色ニヨルコト也
アサ花田ノカイフハ
海賦也大浪ニ
ミルヤ貝ナド文ニ
ヲリタル也アサ花田ナレバニホヒヤカナラズトテコキ
クレナイノカイネリトハ花ナルノ心キリヤウ也

花云山吹ハ面クチバ
ウラ紅梅ヲ云也
此ハ花ヤカニツモ
リナキ文トハ云リ 是ハ玉ニ似合タル句成

りとの給へはおとゞうちわらひてつれなくて
人の御かたちをしはからむの御心なめりなさて
はいつれをとかおほすと聞え給へはそれもかゝみ
にてはいかでかとさすがにはぢらひておはすこう
ばいのいと紋うきたるえび染の御こうちきいま
やう色のいとすぐれたるとはかの御れう桜の
ほそながにつやゝかなるかいねりとりそへては姫
君の御れうなりあさはなだの海ふのおりもの
おりざまなまめきたれどにほひやかならぬにいと
こきかいねりぐして夏の御方にくもりなく
あかきに山吹の花のほそながはかの西の対に

花云物ノ色アイハ玄上ヲ分ニカギリアルモノ也ヨキレ氏又アシキカタチナキモ有ワロケレトモ又ミレバヨキモアリ人ノ形ハカギリナキモノ也

ソコイアルトハカギリナキ事也河ノ説アシド〻ハ巴云紫ノ人ノ容シリタニハント思テ源ノニギラカシノ内ニ〻〻

奉れ給をうへは見ぬやうにておぼしあはすうちの（玉ノ父）
おとゞのはなやかにあなきよげとはみえながら（源ハ玉ノテイヲ見）
なまめかしうみえたるかたのましらぬにゝたるな
めりとげにおしはからるゝを色にはいださせ給
はねど殿見やり給へるにたゞならずいでこの（源ニミラレテ紫ノハヅカシキテイ）
かたちのよそへは人はらたちぬべき事なりよき
とても物の色はかぎりあり人のかたちはおくれたるも
又なほそこひある物をとてかの末摘花の
やなぎのおりものゝよしあるから草をみだれ（上白裏青夏ハ柳ノ花色トス）
おれるもいとなまめきたれば人しれずほゝゑまれ
給ふ梅のおり枝てふとりとびちがひからめいたる

花云アヲニビハ尼ノキル物也クチナシ深ノ衣モ尼ノタメニ可成ヨリテワガ尼レウト思タルヲ添ラレタリユルシ色ハ紅ノウスキ也王家ノ人モ着ノ衣ニ用ル例アルナリ了海ニキナルユルシ色トノセラレタリ必キガチナニ成タルユルシ色ハウス紅ト可心得何モ同日ニ着用似合タルヲ二ゼシノ心可成

ウツセミハ二条院ニ
ホハ二条院東ノタイ
イシ六条院ヨリハ
ホドトヲキ也

しろきこうちきにこきがつやゝかなるかさねて（見ヘウナキヽウナキニテミエタリ　コキ紫ハ世ニコトミカシミテソムル）
あかしの御かたに思ひやりけだかきをうへはめざ
ましと見給ふ空蝉の尼君に青にびのおり物いと
心ばせあるを見つけ給ひて御れうにあるくちなしの
御ぞゆるし色なるそへ給ひておなじ日き給べき（元日也）
御せうそこきこえめぐらし給げにゝ
つきたるみんの御心なりけりみな御かへりどもたゞ
ならず御つかひのろく心々なるに末摘花東の
院におはすればいますこしさしはなれえんなるべ（門流く）
きをうるはしくものし給人にてあるべきことはたが
へ給はず山ぶきのうちきの袖くちいたく

はしけ小袖ぞはれすそうちかけ給へ御ぬゐも
主ノ衣ナノリト云ヘシ
まはゆくかうばしきそらだき物のかほりとも
色あはひかさねげん氏ふうぞや紗へはいなつかしく
柳ノ裏ノ名ナキシウラニ作ル
ふきうす、

末
きそ見まひうらみられ給わりつ方へ座ね

花云情ソニアフヨリテ
三四人サシフドヒテアヱ
ナドミルモアリ今案
アフハ奥ノ字ノアフナデナド云モヲクナキんヽ
オクトハアナタヽアナメトハ之ニシ声ヲ云ナリ
末ノ手跡ノ昔見タヲ
ニ云ト、、、

てん袖袖ぬらしてはてむすぢあとふあふよわ有
奥 昔ニ見ト云ヘリ
ちわいといふく限く色く給てとんなも於てき給い
給ばうへなま事なくん出る身なこをつまんへて候
はつひ小つぼき巻たる物をいとまびしくみつはする

凡文末ヨリ次ニハリタ
ル小袖ヲ源ノ前ヘヒシタ
レバ源氏気色アシキ由

いるし出る御かしてはて気色けはひすべわ
御まぞぬれたしくそのくはづめきわひくわ

かく座うふわかなうふ源めよしうけうけこたへいふ義
源人は末ノ
末みはきこゑまへ末寺の志ようよそそまぼろひぬべく

古代末ヲサシテ
唐衣君カコヽロツ
ツラテレバ袂ハカクソツ
ツボナフノミ 末ノミラ末フムノ巻ニ見タリ
末ノ手ハカラ衣袖ヌルヽノ句ハナレガルトヽ

おがはそ給りしれまみなわこぐれん乃奇すまんいりつ
源ヲ威ノミルメ
源俳
こ給もたりとぬ御くりあとこうはなま給なま給も

我モ一節ニテユル
カヌ等ヽトヽ

我のはすうりしそうふひとはぢみまはりまてゆきの
めまいさる玄氏袋ふゆ佐まぢ給まぬあうまこさこさとい

わチタキリハ人中
ニテノ年令ニハニト
イト三文字ヲ呼ヨミ
出シ又好色ノ風流ニミラノアラソイニハ
アダ人ノト五文字ヲ呼ヨミ出スヽ末ノ
我以一ス等ヨミ
ハトヽ

又あれ人のなりふ源うけ残おわかしれまへなとの
わきとお源奇すまんのなりまていまはぬはなま給見
三ノ字ナシ
りうりし昔乃巻さうのおりしまいとど見ふれあさ
人れといふふいはりしをやさあととて給ようちををきて
中ノ五文字ヲ云
上ノ五文字氏云リ
言い袋乃はききたまわはるこ地はべかめわなど

山ト云ニ花ノ詞ニコソ之引 トムフ一ツ菓子ニテ 一ニ尽ミニテソレサラ ヨミ給トし

わろひ給ふよ法律のさうし侍まくらよくはない
しわらはくして見れうちの云薬をとわ出るによみ
法はよたるすちらかいはなかりしさ法へはまた
うちの御この義理給へ至るるう度みみのさう

和字煩悩四病七病 八病ト云ニテノ病ナド ヲチヲメル菓子ナリヤヤウノムツカシキモノニテ 評ヲヨミニハ動ズベキモアラザルトシ共ヤウ 歌人ニハ初ヨリヤサノ抄物ヲミスレバヨキトし 無作ノ人ニ初ヨリ如此ノ抄ヲミスレバ 殊ニヤチテ分ガラアシキと上手ヤ自ヨミ 上ノ病ナシト…

ーをようの見よとて有こ世給へつ乏しまるい此さい
あらいとあをうやまひさ法べ美あおかうるるしうは
あととよわをくれさはうるのいかさなすらくうこき
すべくもみしさわしうかむつうしくそかへして
きよくはあいしわたまへ法人のくちはまよりては

代々ノ集ノホノ二子給トし 多ノテイ宗タル詞アル歌し

めなまてしうあまとそおしくあかいさ法さ被す
いとおし浅ちう人いはとまめ度のまてなどてか度

ホヨリシラニモシヤリ テシ油ラヌラシテト アルニヤシナカラハ ヒガートスヽメ給し

給ろんうきとめて外表有りとさんをまわ給へうわ
人法りのをこしかも物のなうなわしもむしりかな
うしなひて乗みぬ人りさんさとりうつもとと

也ニ源ノ詞ト云リイカ

或記ニ女牛ニニ文字トヨムアリ ソコナナクトアルニイカド

うわけまかうの給ひあきさの御学官にいとよう
なうらむかべて女いたてさのめふすまうらそ
しかんぬるいふまよかうぬことなるなふすもいと
はまよなうらむいわおかうむたんのすち我たた
よはしうしばもてしはめをもそなさらのなるん
乃こなんめやすうはへうわをはなどのたまひて侍
返すいたはしもうけ出ばかへし度わてんと
あめふ有りこまさをわ有しうんし給いはらむい

古今ニテ　イトセメテ
恋シキ時ハムバ玉ノ
夜ノ衣ヲ返シテゾ
キル　此歌ヲ本ノ
心ニヨメリ涙ノ心ニ
我アニリ夜ガヘシ衣モ
トヽ猶猶ハぎノ
事ヲモスヘテ夕ニ
ハ又可成

ひかくしうらむ心そくのりしやるし路ふかきさけ
涙てぬ涙んまてうき路ふ心とんやとをあわ
うへさむとりふかつきてもうらしきれま涙乃
衣を思ひこそ露まちとりるまやとそ河め涙